

## 大平総理にみる政治家の誠実考

川内 一誠

五十五年体制が定着し自社対決の最も華々しい時代、社会党の国対委員長として縦横に腕をふるった「山幸」こと山本幸一氏が、池田内閣時代の或る夜、ひそかに大平官房長官の私邸を訪ねた。国鉄当局と国労とが、手当てをめぐる激しく対立している時だった。手当てを出せばストを避けることができる。真剣に訴える山幸氏の発言に、じつと耳を傾けていた官房長官、やにわに電話をとると池田総理の所へ電話をした。電話の様子では、総理は一度金を出すと習慣になる、と手当ての支給に強く反対しているようだ。それでも大平さんは引き下がらずねばり強く説得を続け、とうとう了解をとりつけ、国労のストは回避された。「私の話を聞くとすぐ目の前で池田さんに電話をかけ、しぶる池田さんを説得してしまった。クリスチャンらしい誠実さというか、とに角どんな場合でも約束はきちんと守り、相手を裏切ったりはしない誠実な人だった」。

山幸さんは、政治生活の中での印象深い思い出の一つとして、大平さんの努力で国労のストが回避できたことをあげる。この例に限らず、大平さんの政治家としての誠実さを示すエピソードには事欠かない。

### 「総理と一〇〇人のこともたち」の想い出

私も大平さんの誠実さを感じさせられる場面には数多く出会っているが、一番印象に残っているのは政

治的局面における行動ではなく、政権の座についてから半年余りたった昭和五十四年（一九七九）八月四日、テレビ朝日系列で放送した「総理と一〇〇人のこどもたち」の収録の時のことである。

この年は、国連が世界中の子供たちがもつと幸せに暮らせるよう皆で子供たちの未来を考えようと制定した国際児童年。世界各国でさまざまなイベントが展開され、日本でも名古屋で「世界のこども日本のこども展」が開かれるなど、いろいろな催しが行われた。その記念行事の一つとして名古屋テレビが、全国から百人の小學生に集ってもらい大平総理を囲んで子供たちの未来について話し合おう、という特別番組を企画した。

総理の出演交渉には、当時テレビ朝日の官邸キャップを務めていた私が、名古屋テレビの系列局という関係から担当することになった。いくら夏休みで国会休会中とはいえ、現職の総理に名古屋まで行ってもらうというスケジュールがとれる筈がない。その上、内閣記者会と総理官邸との間には、総理のテレビ出演は毎月一回、NHKと民放が交互に担当するという内々の申し合わせがある。就任直後の地元テレビへの出演を除いて、例外を認めた例はほとんどない。ということから、交渉に当たりながらも実現の見通しは薄いと思っていた。

ところが、森田一総理秘書官から「総理はこの番組に乗り気だ」という連絡が入る。内閣記者会も、国際児童年の特別番組ならと例外を認めてくれた。ただ名古屋までは行けないので、東京六本木のテレビ朝日のスタジオで収録することで、ひょうたんから駒の番組が実現することになった。

収録の日、大平さんは細い目を一層細くして、テレビ朝日の第六スタジオに集合した百人の子供たちの前に現れた。

子供たちは系列局を動員して、北は北海道から、南は香川、福岡まで幅広く集めた。大人しい優等生的な小學生が多い中で、異彩を放っていたのがABCのプロデューサーが引きつけてきた近畿ブロックの小

学生。京都や神戸の代表はさほど目立たなかったが、地域性のもたらすものが、大阪代表の数人は口八丁手八丁で、そのまま吉本興業の専属にしてもやって行けるような猛者揃いだった。

司会はTBSから独立してフリーになったばかりの久米宏氏。軽妙な司会ぶりだった。

冒頭で大平さんの印象を聞いたところ、

「カッコいい」

「やさしそうで楽に話せる感じ」

という答えがつづく中で、大阪代表は開口一番、

「実物の方が足短いし、いましゃべった時そんなにアーウーいわへん」

大平さんも、思わず苦笑いする場面だった。

「小さい頃、何になりたかったのですか」

「学校の先生になりたかった」

「小学生の時の成績は」

「良くも悪くもなかった」

などのやりとりが続き、

「大平さんは、子供のころ良く勉強しましたか」という質問には、

「勉強は学校でするだけだった。家に帰ると、仕事をしなければならなかった。田んぼに出たり、麦稈真田（ばっかんさなだ）を編んだり。一日にこなす責任量があつてね、それをしないと遊びにも出してもらえなかったな」

と、スタジオに用意してあつた麦わらを真田紐のように編んで行く麦稈真田を手にとると、「僕の編み方と少し違うな」といいながら、自身で続きを編んで見せたりもした。

「なぜ総理大臣になったのですか」

「ライバルは誰ですか」

「好きな歌手は」

「天皇にはなぜ選挙権がないのですか」

「政治家になるためには、何が一番大事ですか」

「解散はいつやるのですか」

など、さまざまな質問がとび出したが、近畿ブロック、とりわけ大阪の小学生にマイクを向けた途端、質問がユニークになる。

「大平さんの背広はいくらですか」

「十数万円ぐらいかな」

「どんなパンツをはいていますか」

「二枚はいていますね」

「種類は」

「すぐ肌につけると、もう少し長いのと、何ていうのかな」

「パッチャ」

どんな質問にも丁寧に答える。

「奥さんは美人ですか」

「まあ人並みっていうところかな」

久米氏が「人並みっての意味わかる」と浪速の悪童にマイクを向ける。

「そのへんにおる女」

今度は、大平さんの方を向いて「それでよろしいでしょうか」

「結構です」

にこやかにうなづく。

子供たちのたあいのない質問にも、言葉を選びながら一つ一つ丁寧に答える。番組を担当したディレクターも、

「はにかんだような表情で誠実に答えていた大平さんの姿が、今でも目に浮かぶ。テレビを見た人にも良い印象を与えたよつで、放送したあと大平さんの人柄に感銘を受けたという反響がかなりあった、と記憶している」  
と語っている。

政界の表舞台で脚光をあびることになった池田内閣の官房長官時代、中小企業発言や麦めし発言にみられるように、とかく暴走しがちな池田総理に寛容と忍耐の政治姿勢をとらせたのははじめ、大平さんの政治行動は常に誠実さと謙虚さに裏打ちされていた。「総理と一〇〇人のこどもたち」番組は、相手が小学生だったがために、より一層、大平さんの人間性が出たものといえよう。

こうした誠実さの原点は、どこにあるのだろうか。政治家になるずっと以前、大蔵省に入省して二年後、横浜税務署長から仙台税務監督局間税部長に転動する際、台風による洪水で東京、横浜間の交通が麻痺していたにもかかわらずトランクを頭にのせパンツ一枚になって六郷川を渡り、予定通り仙台に着任したという行動など、青年時代から誠実さが身についていたことをうかがわせるエピソードも残っている。

## 大平流政治スタイルを見習へ

政治不信の風潮が広がる中で、政治家の言動に信頼がおけないからという理由が圧倒的に多い。政治不

信を、政治家不信を回復するために、もう一度、大平政治の原点を見直したらどうだろうか。

だからといって、多くの政治家に大平流の政治哲学、誠実さを求めるのは木に登って魚をとるように難しい。大体、大平さんの誠実さは、政治家になってから心掛けて身につけたものではない。キリスト教と出会った高松高商時代、あるいはそれ以前から持っていた資質なのだから。

ただ、政治スタイルとして大平流の「汗を惜しまぬ政治」「寛容と忍耐」を真似て、口先きだけではなく行動にうつして行けば、国民の政治家に対する評価も変わってくるのではないだろうか。現に大平さんが官房長官として仕えた池田総理の場合、寛容と忍耐の低姿勢が段々つけ焼刃的でなくなったという。伊藤昌哉氏も、その著書『池田勇人 その生と死』の中で次のように述べている。

池田の低姿勢は巷間いわれたような、うわべだけ衣の下から鎧がのぞくという擬態ではないが、同時に低姿勢が池田本来の姿だということでもなかった。池田はその政治姿勢を低姿勢におくことによつて、それ以後、政治家として、人間として成長をとげていたのだ。

池田総理のように、最高のポストまで上りつめた後でも、政治家として、また人間として成長することができるのである。

大平総理の誠実さは、あくまでも大平さん個人の人生経験や深い教養などさまざまな要素が織り成して完成された類いまれなものではあるが、政治スタイルとして見習うことは可能であろう。もし、それが池田総理に見られるように身につけたものになればいいし、よしんば単なる政治的パフォーマンスであっても、有権者に良い感じを与えることは確かである。

古いビデオを見ながら大平総理の政治家として、人間としての誠実さについて、改めて考えさせられた次第である。